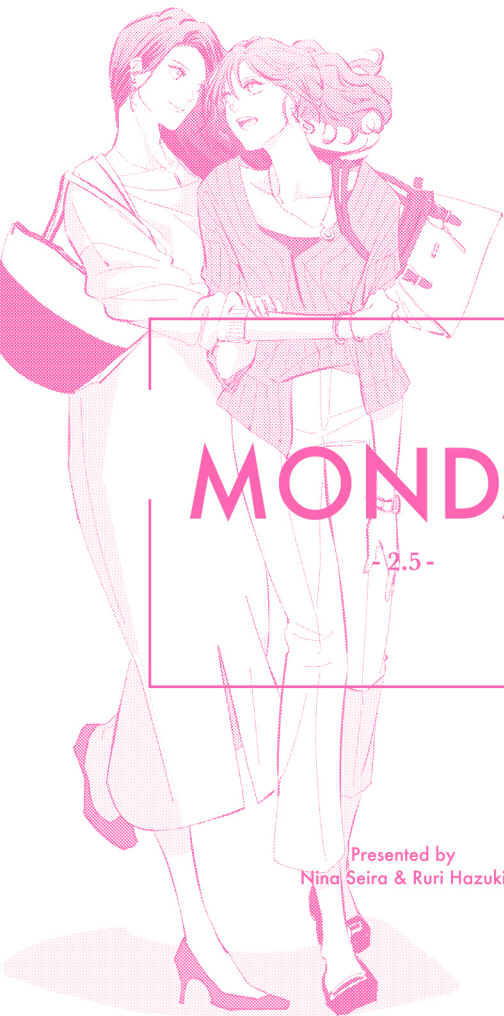


いつものちがう月曜日

Presented by
Nina Seira & Ruri Hazuki

MONDAY



MONDAY

-2.5-

Presented by
Nina Seira & Ruri Hazuki

いっもとちがう月曜日

Muse
Saturday



いっしきふうか
一色冬歌 (27)

イベントプランナー / ディレクター
舞夏の後輩



みさきまなつ
三崎舞夏 (27)

イベントプランナー / PR
冬歌の先輩



ひいらぎななせ
柊 七星 (24)

イベントプランナー
冬歌より三期下



もみぢづる
紅葉千弦 (22)

イベントプランナー
冬歌より四期下



ちあきゆり
千秋百合 (32)

イベントプロデューサー
PR部からの異動



あきつふたば
秋津二葉 (28)

人事
舞夏の同期

- 1. But First, Coffee**
肩を貸す 5
- 2. Don't Know The First About It**
誕生日を祝う 37
- 3. My First Concern**
初めての朝を過ごす 94
- 4. First or Last**
初めての朝をやり直す 126
- 5. Be The First To Love**
手をつなぐ 148
- 6. First Thing I Know**
見つめ合う 186

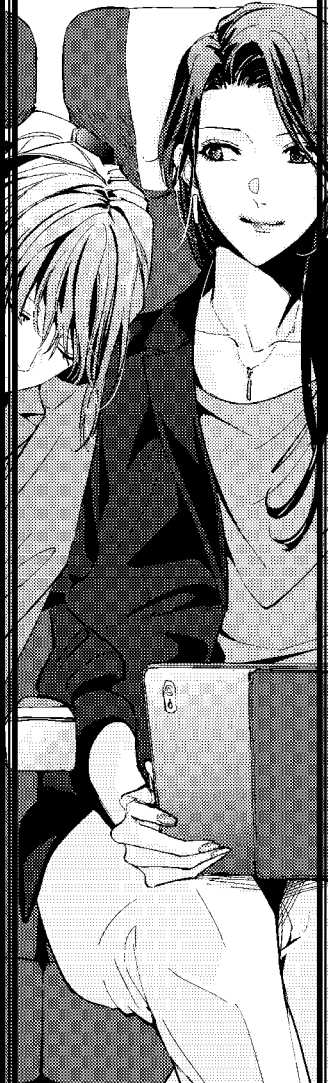
Monday

6 STEPS TO LOVE YOU MORE

But First, Coffee

Step 1 肩を貸す

PoV. Manatsu



「あれ？」

感情には、たぶんフォーカス機能があるのだと思う。

イベント運営という職業柄、常に周囲を観察し人の顔を判別する癖がついているけれど、どちらかと言うと、それはゆるやかなパノラマカメラに似ている。仕事中は、常に冷静だからだ。こんなふうに最初から何かにだけバチツと焦点が合うことは少ない。

それに、朝八時過ぎというとんでもなく混んでいる時間帯の東京駅は、すれ違いうすら難しいほどの混み具合だ。ぎゅうぎゅう、と表現したくなる感じ。その中で、まるで顔認証の白い枠が見えるように、少し右で揺れるポニーテールがくつきりと視界に収まるなんて。

会いたいという感情には、なにか特殊な識別能力があるのだとしか思えない。

「あ！」

私の唇からこぼれた声に反応した頭が、人混みの中で歩きながらこちらを振り向く。ぱしりと視線が合うと、眠そうに細められていた瞳が急に丸くなった。

「舞夏さん！」
まなつ
いっしきふうか

一色冬歌、私の後輩だ。

今年の四月、うちの部署に新入社員としてやってきた新人。怒涛の夏を越し、ついに秋も終わろうとしているのに、未だに私の名前にスタッカートをつけてくれるかわいいうい後輩。

「ふゆちゃん」

名前を呼び返す私の声も、弾んでいたと思う。会社で会うのも、現場で会うのも、別に珍しいことじゃない。同じ出張先へ向かう駅のホームで会うことも。でも、今日はそのどれでもなかった。

弾んだ声は朝からヒールを鳴らす速度で歩いていくせいで、知らず知らず上がついていく口角をいつもの角度でとどまるよう、キュッと引き締めた。

すぐには近づけないので、少しずつ歩いている列を変えていく。十歩ほど進んだところで、隊列を乱すことなく隣に並ぶことができる。もちろん、立ち止まって挨拶をしている余裕はないので、流れに押し出されるように進みながら、しばらく歩く。数メートル先でようやくやくぴたりと隣に陣取ってきた後輩が、こちらを向いて朝の挨拶を

してくれた。

「おはようございます!」

人混みに負けない、でも、私にだけ届く絶妙なボリュームで。

その白い頬に少し顔を寄せながら、私も同じ挨拶を少しだけ先輩ぶった言葉遣いで返す。

「おはよう」

そんなオリジナリテイのない私のセリフに、私の後輩はぱあっと頬を染めた。本当に嬉しそうに。

その反応は、ちよつとオリジナリテイがある。

ふゆちゃんは、そもそも、些細な喜怒哀楽の全てがストレートに顔に出るタイプだ。一見、冷たく見える整った美人なので、たぶん意図的にそうやってバランスを取っているんだろうなと最初は思っていたけれど、付き合う内に、単に非常に素直な性格らしいということがわかってきた。

なので、見た目のスツとした感じとは裏腹に、一色冬歌という人は後輩でいるのがとても上手だ。少なくとも、私は朝八時のこれから寝ていこうかなと思っっている新幹

線の駅でうっかり先輩に会ってしまったって、こんなに素直に嬉しそうな顔はできない。私は私で、先輩でいる方が得意だと今年しみじみわかったので、そういう意味では、私たちは良い組み合わせなのだと思う。そして、実は同年というのがこんなにも気安い一番の要因かもしれない。ガチガチの上下関係というよりは、お互いにわかった上で先輩後輩ごっこをしているという感じがある。なんとなく。

今日も後輩然とした口調で、ふゆちゃんが会話を少し膨らませてくれる。

「何時の便ですか？」

「三十分の、のぞみかな」

私もよくある世間話のつもりで答えたら、思っていたよりも強い反応が返ってきた。

「あ、ほんとですか！」

「え？ うん」

「わあ！」

こまめにスタックカートをつけながら、私の後輩はにつこりする。こういうまめさは私にはないものなので、いつもすごいなと感じるところ。仕事相手という間柄でも、端折らずに感情をちゃんと表現するということ。それは、一種のサービスだと思う。

その対極にあるのが、私の同期・秋津二葉^{あきつふたば}だ。朝でも一人だけ夜みたいな美人で、

二葉は徹底して感情を出さない。いつも人より温度がマイナスという感じが、それはそれで尊敬に値するのだけれど。

そんなことを考えていたら、スツと目の前にスマートフォン画面を差し出された。

「同じです！」

「あ、ほんとだ」

はい、と会話に句読点をつけるように、トレードマークのポニーテールが揺れている。それを視界の端で眺めながら、私は会議のときに聞いた情報を脳内で検索した。

「でも、ちよつと早くない？」

今週末のふゆちゃんの出張先は、確か京都のはずだ。午後から動けるように入りま
す、と報告していたことを思い出す。神戸にお昼までに入るスケジュールの私と同じ
便だというのは、普通に考えて少々せっかちな選択だ。そしてこの後輩が、前の晩眠
った時間にかかわらず、朝はいつだって少しでも長く寝ていたいタイプだということ
は、この一年の付き合いでよく知っている。

そうなんですけど、とふゆちゃんは眉をしかめた。

「最後、ローカル線なんですよ」

「あ、なるほど」

Don't Know The First About It

Step 2 誕生日を祝う

PoV. Fuka



「えっ」

人の手元を勝手に覗き見て乾杯よりも大きな声を出したのは、隣に座った後輩だった。すみません、と慌てた声がある。突然の謝罪を聞き流しながら、とりあえず空欄を埋めたカードを店員さんに手渡すことにした。

「よろしくお願ひします」

人がしていることを遮るような性格ではないので、隣の後輩はじつと神妙な顔をして座っている。会員カードが運ばれていくのを焦れたように眺め、もういいだろう、と思っただらしいショートカットの後輩が、改めてかわいそうな声を出した。

「先輩」

「うん？」

「今日、お誕生日じゃないですか……」

まあね、とわたしは簡単に答えた。

たしかに今日はわたし、一色冬歌の誕生日だ。

会員になっていただければお酒が全品半額になります、と手間をかけるかいのある提案を受け、手渡された流れでわたしが代表して記入することになった。カード発行のための記入用紙には、もちろん生年月日の欄もある。向かいに座った後輩の謝罪は、あまり気にせず書き込んだ数字に向けられたものだったらしい。

「すみません」

重ねて謝罪を受ける。何をするつもりなのかもはや半分腰を上げて今年の新入りに、いいのに、と思う。でも、声をかけて座らせようとしたら、もっと物理的なストンプがかかった。

「だめだめ」

長い指が、背の高い後輩・柘七星ななせの肩をくつと押し、あつという間に席に着かせてしまう。無駄のないスマートな動作、そして、笑いを含んだ明るい命令形のセリフ。

「君はここにいなさい」

「三崎さん！」

「舞夏さん」

柘の声に、わたしの声が重なる。舞夏さんは、わたしの、正確にはわたしたちの先輩だ。

「あ、でも、えっと！」

指に促されるまま、すっとと素直に腰を下ろした柊が、また慌てて立ち上がろうとする。

「なんでよ」

その肩を面白そうにもう一度下に押し、お疲れお疲れと全然疲れてないテンションで繰り返しながら、舞夏さんはわたしの向かいの席に腰を下ろした。年次通りの席順だ。

「あ、ちゃんとチェックインできました？」

柊が舞夏さんの手荷物を受け取りながら、心配そうに尋ねる。だいたい、この子はすぐに心配になる性質なのだ。時としてちよつと気を回し過ぎなくらい、この先輩は先輩という先輩に気を遣う。そんなことをしていたら、部署どころか会社全体が先輩なのだから気疲れて倒れてしまう、とこつちが心配になるレベルで。

「うん」

その軽やかな答えとは裏腹に、舞夏さんが一瞬眉をしかめた。なんだろう？　と思う。理由はすぐにわかった。

「柊、勝手に私の部屋だけアップグレードしたでしょ」

「あ、はい。なのでちよつと心配に」

チェックインは問題なくできました、とわざとらしく作った怖い顔とは裏腹に、至つて丁寧な口調で告げたわたしたちの先輩は、すぐに砕けた口調に戻る。

「でも、なんなの？ あの部屋。すごいね」

「すごいんですか？」

横から口を挟むと、柊がこくこくと何度も頷く。

「すごいらしいんですよ。倍の広さになりますって、フロントで言われて」

「えー、すご。それってすごいですね」

自分のチェックインした部屋を思い浮かべながら相槌を打つ。

「夜景もたぶん綺麗ですよ」

ほんとだよーめっちゃくちゃいい部屋だよ、と一番年次が上の人が、改めて苦笑した。

「次からは、自分で泊まりなさい。手配した人の特権だよ」

「いえいえ」

柊はといえばさつきまでの恐縮はどこへやら、すっかり満足そうにニコニコしている。もつとも、柊のニコニコは、舞夏さんの微笑くらいの口角の動きで形成されているけれど。

で、と舞夏さんは、会話をぎゅいんと戻した。登場したときに一番ビビッドだった

話題に。運ばれてきたおしぼりを使いながら、いたずらっぽくわたしの視線を捕まえる。

「バレちゃったの？」

「え？」

「誕生日」

「はい」

すみません、とわたしが謝るのを見て、今度は柊が、シンプルに不思議そうな顔になった。

十十

とりあえず飲み物を頼もうか、という舞夏さんの一声で飲み物のメニューを開く。ビール二つにモヒート一つを注文し、あつという間に届いたグラスでいつもどおりの乾杯。お疲れさまでした、の声が重なる。

でも、すぐに最年少の声で謝罪がかぶせられた。

「あの、それで、すみません！」

「え？」

My First Concern

Step 3 初めての朝を過ごす

PoV. Manatsu



この朝が完璧であるように、想像なら何通りもした。

私が先に起きるパターン、二人ほぼ一緒に目覚めるパターン、眠ることなく朝にたどり着いてしまうパターン、起きてもベッドから出たくなくてまだ眠っているふりをしてるうちに、どちらもまたうとうと微睡んでしまうパターン。

唯一想像しなかったのは、ふゆちゃんに先に起きているパターンだ。私の後輩は、寝起きの悪さには定評がある。一度寝たら、たとえ先輩でも起こすのはとても大変な作業だったし、どんな状況でも一定の時刻を過ぎるとすこんと充電が切れたようになるタイプ。職業柄、毎週末別のベッドで不規則な睡眠を取る生活をしているけれど、眠りが浅くて困っている現場に立ち会ったことがない。

なので、幸福な気持ちで目覚めた瞬間、これが正しい朝だとわかった。

白い天井、この季節にしては極端に薄着なお互いの体からシーツの間で直に伝わる体温、肩をくすぐる私より明るい色の髪と静かな寝息。私が、先に起きた。

いつもより少し設定温度を下げたエアコンと、いつもと違う香りをさせながら動く加湿器の音が交互に聞こえるベッドルームは、もう少しで電気をつけなくても十分な

ほど光が差し込んでくるはずだ。太陽の光くらいで横に眠る相手が目覚めるとは思えなかつたけれど、なんとなく先に朝を始めておいたほうが良い気がして、ゆっくりと起き上がる。そのままベッドを出ようとして、私はシーツの間から覗いた肩に慎重に唇を落とす。これくらいはいいだろう、と線引きをして。

いつも通りきつちり着込んだままだったガウンを一度脱ぎ、中にサラッとした白のニットとインデイゴのデニムを着込み、再び上から羽織る。一日中家にいる日の、定番スタイルになると少し落ち着き、落ち着いたことで自分が少しふわふわしていたことに気づく。まあね、と思う。そりやそうでしょうふわふわもするでしょうよ、と自分に甘い結論にジャンプし、白いフローリングの上に散らばっている昨夜の名残を一つ一つ拾い集めることにした。

身につけてバスルームから出てきて、結局一時間も着けていなかった私ではないシンプルなラインの下着、同じタイミングで脱がせてしまった貸しがいのない夏用の薄いワンピースとロングカーデイガン、揃える暇もなく脱ぎ散らかされた二つのスリッパ。どれもそのままにしておきたかつたけれど、それは今日じゃない、と思った。それはまだ、今日じゃない。

まず一番簡単なものから手を付ける。カーテンを開け、下げていた空調を戻し、ス

リップスを揃える。少し迷って、今日も午後から入社するのだからと思い、乾燥機までフルコースの洗濯機に下着を入れ、ワンピースとガウンはまとめてヘッドボードに置いた。

ヘッドボードの上には、いつも着けっぱなしにしている指輪がバラバラに置かれていて、その一つ一つを外したタイミング全てを仔細に覚えていることをふゆちゃんには言わないことにしよう、と思いつながら、左手から順番にはめ直す。白い朝の光の中に散らばっていた幸福な名残を元の場所に片付けると、まるで何事も起きなかったかのような静かな寝室が完成した。

さて、と小さく息を吐く。朝を始める時間だ。

キッチンに向かい、物の少ない冷蔵庫からオレンジジュースを取り出す。

ぴかぴかに明るい色の液体を背の高いグラスに注ぎながら、私は自分が小さく鼻歌を歌っているのに気づいた。

まだ六時前だ。冬の朝は清潔に冷たい。着替えはいつも空調の効いたベッドルームで済ませてからやってくるので、朝にリビングのエアコンをつけることは、あまりない。でも、今日は少し暖めておこう、と普段なら押さないスイッチを押す。

幸せそうな寝顔を置いてベッドルームを出ることが、こんなに幸福だなんて知らな

かった。想像を繰り返した朝はおおむね想像通りで、頭でシミュレーションしていた幸せよりもずっと複雑ですつといい。

十十

正式に我が家に朝が訪れたのは、三十分後のことだった。

遠慮がちにドアを開く音がし、少し遅れて、先ほど自分でも使ったハンドソープの香りが漂ってくる。私は食パンをトースターにセットし、びっくりするくらいに堂々とした昨夜の立ち振る舞いが嘘のように、ドット絵くらいの動作の硬さでリビングに入ってきた後輩へ向けて、極力あつさりとした第一声をかけた。

「あ、ふゆちゃん」

「！」

ベッドルームにいらなくてバスルームにもいなければ、たいがいここに私がいるのはわかっていたはずなのに、声をかけられたことに新鮮にびっくりした顔で背筋を伸ばした相手の返事は、動きと同じくらい伝達が遅くてぎこちない。

先ほどまで枕に広がっていたふわふわの髪は、いつも通りのポニーテールに結えら

れて後ろで揺れている。ワンピースの上にしつかりとカーデイガンも羽織って、ぱつと見は昨夜ワインを飲んでいたときよりも、いつもの後輩に近い。

「おはよう、ごさいます」

「おはよ」

シンプルに朝の挨拶を返し、ふゆちゃんは喉が渴いているかもしれないと思つて、オレンジジュースではなく水をグラスに注ぐ。手渡すのはどう考えても危険そうなのでソファアに座るよう促し、グラスはリビングのローテーブルに置くことにした。

「どうぞ」

「……はい」

画面越しの会話でも、今時ここまでではないだろうという時差がある。しばらくして聞こえてきた、あの、という久しぶりにふゆちゃんが自発的に発した言葉は、ぽんつという景氣の良い音にかき消された。トーストが焼けたのだ。

「うん？」

「あ、いえ」

「パンでいい？」

「あ、はい」

いつもなら弾かれたように立ち上がり、お皿を出したりバターを出したりしてくれるはずの後輩は、飲み込んだ言葉でピン留めされたかのようにソファに座っている。微動だにせず、の見本のような光景は面白かったのでそのままにしておくことにして、私は余熱で焦げてしまわないうちに、朝ごはんを回収しに行くことにした。

ポップアップ式のトースターから顔を出していたトーストを一枚ずつお皿にのせ、バターを溶けるに任せて放っておく。大きなフライパンを温め、先に片面だけ焼いたベーコンをひっくり返して卵を落とし、ベーコンエッグを二ついつぺんに作る。焼き上がるのを待っている間に、なんとなく緑のものが欲しくなってキウイを切った。

フライパンが立っているじゅうじゅうという威勢が良い音、まな板とフルーツナイフがカタンと当たる控えめな音、どちらもクリアに暖かい室内に響き渡る。私もふゆちゃんも、わりと取り留めないことでもずっと喋り続けている方なので、こんなに静かな五分間は出会ってから初めてかもしれない。

フォークを出すかどうか迷って、なんとなくシンプルな動作で食べられる方が良い気がして、私は綺麗に卵が半熟になったベーコンエッグを注意深く、バターが染み渡ったトーストの上に滑らせた。塩胡椒のミルを挽く音も、ざっざっといつもよりクリアな音で響く。

リビングに戻ると、形状記憶のように先ほどと同じシルエットのまま、まるで異動先を告げられるのを待っているかのような深刻な顔でふゆちゃんは固まっていた。

「あはは、すごい顔してる」

かたんとプレートをテーブルに置くと、それが再生の合図だったかのように、ポニーテールが大きく揺れる。

「眠れなかった？」

適度な距離をとって隣に腰掛け尋ねてみたら、ようやく意思疎通のこたえがもたえられた。

「いや、あの、はい。眠れました」

もつとも、覗き込んだ顔は真っ直ぐ前を向いたままで、電源の入っていないテレビに向けられている。本当に全然視線が合わないな、と思い、それは私の中で夜の記憶を色濃く呼び起こして単純に幸せになった。よかった、と相手に見えていないのはわかりつつもにつこりとし、いつもの癖で背中に触れそうになる手を、ぐつと堪えて胸の前で揃える。

「いただきます」

「いただきます」

挨拶はいつも通りだったので、もう大丈夫かなと思つたら、パン、と目の前に置かれたものを初めて認識したように呟く声が聞こえた。

「うん、パンがあつてよかつた」

ゴールドのピックを刺したキウイに手を伸ばしながら、会社で並んで昼食をとっている時と同じ温度の声を意識的に出す。

「ふゆちゃん、パン派だもんね」

圧倒的にパン派のふゆちゃんと違って、私の朝ごはんはわりとでたらめだ。今日みたいにパンを焼くこともあれば、買ってきたおにぎりを食べることもあるし、イベントでもらったシリアルだけで済ませることもある。これからはパンの朝が増えるのだろうか。それは、ちよつとだけくすぐつたい予感だった。

まあでも、予感は置いておいて。

まずは現実だ。

「ふゆちゃん」

「はい」

「喋りにくい？」

+ Adult but Platonic. +

いっもとちがう月曜日

MONDAY

- 2.5 -

無責任会社サタデー

mail@muse-saturday.com

mail



marshmallow



文・星羅にな

絵・綺月るり

発行 2022年3月14日 初版配信

Adult but Platonic.

Adult but Platonic.